

第45回化粧文化研究者ネットワーク研究会報告

「化粧の日本史 美意識の移りかわり」
 講師：山村 博美 先生
 日時：2017年12月16日（土）14:00～17:00
 場所：資生堂FSビル（東京都港区）

第45回研究会は、2016年に『化粧の日本史』を吉川弘文館から上梓された山村博美先生をお招きした。本書は化粧文化研究の分野では、古代から昭和末期までの化粧文化の変遷を通観できる数少ない入門書でもあり、企画した世話人一同、お話を楽しみにしていた。

第一部の山村先生の講演は、本会創立時の世話人代表であり、副会長も務められた故・村澤博人氏の元でポーラ文化研究所に勤務された当時のエピソードから始まった。一同で村澤氏を偲んだあと、山村先生から明治時代以降から2010年頃までの化粧文化史をお話いただいた。著書に盛り込めなかった各時代の流行や新聞雑誌などの広告、特集記事など、収集された資料を提示されながら、2時間にわたってのお話が聞いた。各時代に発売された特徴のある化粧品とその背景、化粧の具体例を紹介されたほか、映画や企業のマーケティング戦略、メイクアップアーティスト発のブランドなどを例に、各時代における化粧のトレンドとの関係にも言及された。

第二部の討議と懇親会では、「最近、化粧への拒否感を卒論

のテーマとする学生が同時多発的に現れているのをどう思うか」との質問に端を発し、その考察や現象自体に対する憂慮を含めた活発な議論がなされた。70年代のウーマンリブ、80年代のフェミニズムなどの主義主張ではなく、何となくの忌避をどう解釈すればよいのだろうか。

山村先生からは、各社が次々に発表する製品の効能が呪文化して、わかりづらくなっていることが指摘された。世話人代表の北山晴一からは、ここ10年多くなったマスク姿は、日本で長く続いた「顔隠し」の文化の復活でありつつも、バーチャル世界が優越しつつある現代人のあいだに、現実との落差に対する過剰反応が広がっているのではないかと、との見解が示された。

出席者からは、化粧が「キレイ」のため、とは一面的な考え方であり、自分の顔の良いところを見つけ、それを伸ばすものである。化粧を人とつながる、社会でうまくやっていく技術のひとつと考えたほうがよいとの若い世代への助言も寄せられた。

今回は、2017年12月10日に終了した紅ミュージアムの企画展「近代化粧品なぞらえ博覧会」と併せて、日本の化粧文化史や各現象に関してさまざまな示唆を与えてくれた会となった。

（山本 芳美）

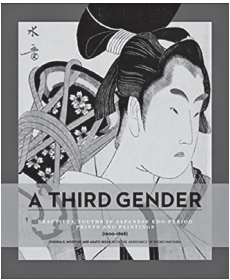


図書紹介



小屋根の上の怒れる神たち
 京都市中心域の小鍾馗像全探索
 池田 進 著

発売：2017年12月
 定価：1,000円（本体）
 発行所：池田進



A Third Gender: Beautiful Youth in
 Japanese Edo-period Prints, 1600-1868
 by Joshua S. Mostow [et al.]

ISBN-10:0888545142
 ISBN-13:9780888545145
 発売：2016年5月
 定価：\$50（本体）
 発行所：Hotel Pub



顔ニモマケズ どんな「見た目」でも幸
 せになれることを証明した9人の物語
 水野 敬也 編

ISBN-10:4905073642
 ISBN-13:9784905073642
 発売：2017年2月
 定価：1,566円（本体）
 発行所：文響社



土偶界へようこそ
 縄文の美の宇宙
 菅田 亜紀子 著

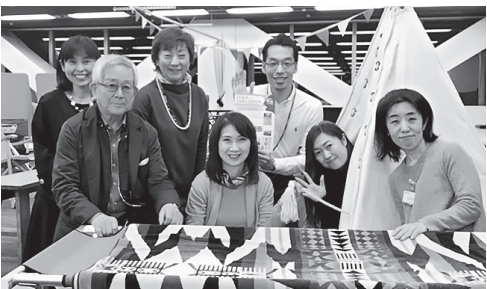
ISBN-10:4634151146
 ISBN-13:9784634151147
 発売：2017年7月
 定価：1,728円（本体）
 発行所：山川出版社

編集委員会だより

ニュースレター Vol.66をお届けします。今号では、今の「顔」をお届けする「Now the Face」、各研究会の活発な活動報告に加え、学会を支える各運営委員会の自己紹介「顔学会ウラの力オ」で、トップバッターとして学会誌編集委員会にご登場いただきました。

ニュースレターはみなさまと学会をつなぐ情報誌です（編集員随時募集中！）。関連イベントなどでバックナンバーを配布・広報いただける場合は、事務局までお知らせ下さい。なお、図書紹介欄に掲載の池田先生のご著書をご希望の方も、学会事務局までおたずね下さい。

（富澤 洋子）



2018年 初編集会議@東芝本社

編集委員



中洲 俊信



高野 ルリ子



菅沼 薫



城戸崎 雅崇



富澤 洋子



正田 真利恵



米澤 泉（協力）



上田 彩子（協力）

J-FACE NEWS LETTER

日本顔学会ニュースレター 66号

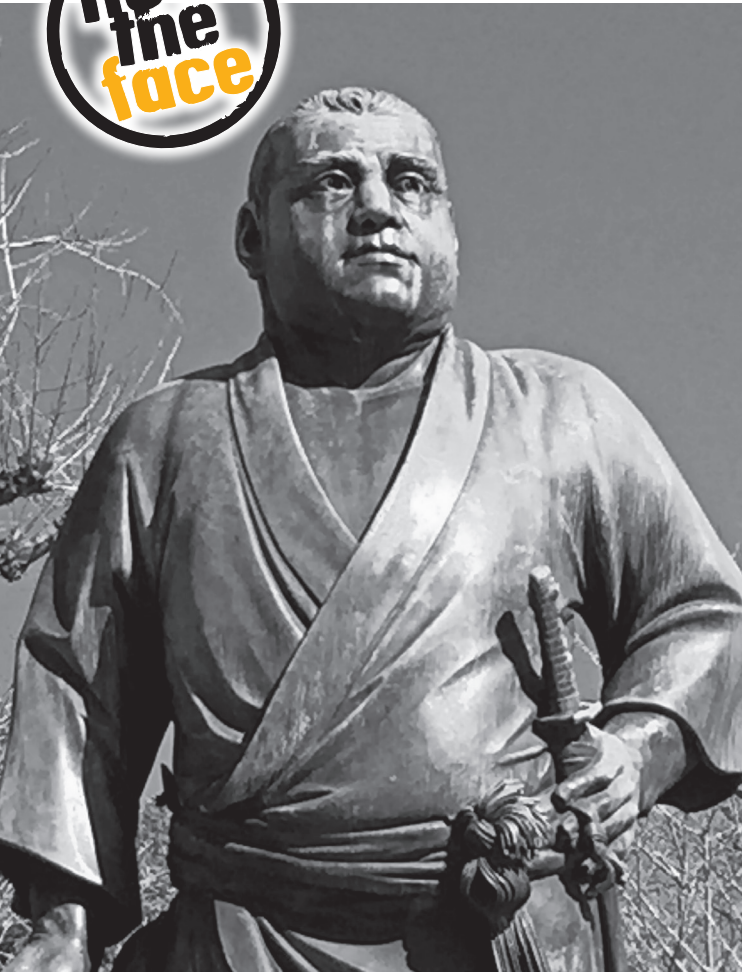
25 APRIL 2018 Vol.66 <http://www.jface.jp>

Contents

- P1. Now the Face
- P2. 第14回若手交流会・第22回日本顔学会大会 若手活動報告
- P3. 第54回イブニングセミナー（日本顔学会／HC塾共催）／顔学会ウラの力オ
- P4. 第45回化粧文化研究者ネットワーク研究会報告／図書紹介／編集委員会だより



第49回 今、感じさせる KAOの人物を紹介する



■肉体と顔をつくる「西郷どん」役の鈴木亮平

テレビっ子の私は、NHK大河ドラマで誰を取り上げるのか毎年注目しています。今年は西郷隆盛の幼少期から幕末、明治維新後の一生を描いた、林真理子原作、中國ミホ演出のドラマです。数話見たところ、毎回「へー」と思わせる演出がされており、女性受けを考えて女性目線でつくられているのかもしれませんが。今に続く日本の礎のような激動の時代を、その時代の人々がどう感じて、どう生きたか、これまでになかった場面

も多くワクワクしながら見えています。とくに楽しみなのが、主役「西郷どん」（せごどん）役の鈴木亮平です。鈴木亮平を知ったのは、2014年NHK朝の連続ドラマ「花子とアン」の主役で、「赤毛のアン」翻訳者である村岡花子の夫役でした。所属するプロダクションによると、鈴木亮平は東京外国語大学（英語専攻）卒ということなので、翻訳出版の社長という役柄にもってこいの経歴でした。身長186センチとは日本の俳優としては相当大柄ですし、朝の顔になっているときは役柄に沿っていたのか、スラッと細く、繊細な文学者のようなどちらかというと静かな印象でした。

ところが、今回は知る人ぞ知る西郷隆盛役ですから、といって西郷隆盛は肖像画や写真嫌いで生きている間に描かれたものは一枚もないということで、巷にある肖像画や銅像はすべて亡くなってから、親戚の人の顔を真似たり、印象を伝え聞いたりして描かれたものと言われています。上野の山の銅像が出来上がったときに、妻である糸子が「こんな感じではなかった」と言ったというのは有名な話です。ということですが、西郷隆盛は日本人離れて相当身体が大きかったというのが定説です。そのため、鈴木亮平は「西郷どん」役に徹するために相当な体重増とトレーニングをつんだのでしょうか、筋肉隆々な肉体とためにメイクした眉にふくらした頬、あごのラインで別の姿をつくり上げています。役作りに数か月をかけて肉体改造をすることは、これまでの映画などでも実践しているとは聞いていましたが、鈴木亮平の西郷隆盛として、多くの人を引き付け、人を温かく包み込むような人柄やおおらかさと優しさあふれる印象を顔や表情からも醸し出しています。

今回のニュースレターには鈴木亮平の顔写真に代わり、上野の山の西郷隆盛像に登場いただきました。快晴の空にどんと立つ「西郷さん」は明るく輝いていました。これからどんな風に展開していくのか、「西郷どん」の鈴木亮平からますます目が離せなさそうです。

（菅沼 薫）

第14回若手交流会・第22回日本顔学会大会 若手活動報告



日本顔学会公認サークル「若手交流会」は、今年創設5周年を迎え、「顔」に興味のある人たちが気軽に交流できる場を作るため、様々な活動を行ってきました。今回は主に第14回定期交流会と第22回日本顔学会大会での活動を報告します。

第14回定期交流会は、2017年11月26日に、株式会社MTG東京支社にて、共同研究をされている早稲田大学人間総合研究センターの菅原徹先生と株式会社MTGの加藤寿恵先生による『魅力顔を創る科学と技術』と題した講演が実施されました。まずは菅原先生が「科学」担当として、特徴的な魅力顔である「笑顔」の心理、健康、印象評価などの効果について、数々の研究と実験結果を元に解説されました。その後、加藤先生が「技術」担当として登場し、MTG社が開発したReFaをはじめ多様な美容製品を用いて、魅力顔をつくる方法について紹介されました。このように内面的にも外面的にも魅力顔をつくる方法は多彩多様ですが、その基盤である健康かつ上向きなところをもつ共通点があることに、参加者全員深く頷きました。

第22回日本顔学会大会では、若手交流会会員に協力を求め

た顔の印象評価オンライン実験をもとに、『CM起用社数上位タレントの顔は流行を作り出すか』と題して3人のメンバーがポスター発表をおこないました。また例年と同様に、独創的な研究活動とアウトリーチ活動を知っていただける若手交流会の活動紹介第2報のポスター発表もおこない、多くの方が立ち寄ってくださいました。イブニングシンポジウムでは、応援団の皆様への感謝から始まり、近鉄百貨店・あべのハルカスにて子供達とおこなった父の日企画の『パピパパラダイス』やユニークなお面を作った寄せ絵顔アート体験、東京大学でのアルチンボルド気分を味わうワークショップなどの活動をお伝えしました。そして特筆すべき点は、「今年の顔」を意識した運営メンバーたちによるブルゾンちえみwith Bのモノマネが会場を沸かしたことでしょう。

2018年も、若手交流会はアクティブに顔と関わる様々な活動を実施する予定です。分野を問わず、「顔」に興味を持った方々のご参加を心よりお待ちしております。

(徐 昶哲)

第54回イブニングセミナー（日本顔学会／HC 塾共催）

顔学講座第11回

『顔の美術史—美術作品における顔の見方、楽しみ方』

講師：原島 博 先生

日時：2018年1月17日（水）19:00～21:30

場所：ルノアール マイ・スペース&ビジネスブース池袋西武横店

今回のイブニングセミナーは「顔の美術史」について原島先生の視座からご講演頂きました。

顔は、歴史画、肖像画、風俗画、幻想画の中で向き、個性、表情、描写と、無限に存在しますから、ここから纏めるご苦労はいかばかりであられたかと、原島先生の研究心にあらためて尊敬の念を抱きました。

西洋美術史に見る顔を、原島先生は5つの「セイ」に分類されました。顔が「聖」なるものとして描かれた時代、それは信仰の対象として存在しました。ルネサンスでそれは人間の「生」を賞賛する表現となります。そうして経済の発展と共にそれは「姓」を識別する装置の役割を担うことにもなりました。また顔は時に「性」の愉悅の役割も。近世になり、世界大戦を機に、人間の存在の本質を問う「精」としてついに表現上、顔は失われるに至ります。

顔の表現は、情報ツールとして歴史を重ねて来ました。情報量が増す度に表現方法が変化していきます。人は顔を求め、ある時は忌避します。

"あるがままの顔を描く"という行いは、それが内なるものなのか、外なるものなのか？鶏と卵のような永遠の課題、まるでメビウスの輪の上を歩くようでもあり、西洋絵画の上でその表現方法はどうやら出尽くした感さえある、とのことでした。

果たして、これから美術の上での顔表現はどのような方向に向かうのでしょうか。ありとあらゆるデータにたっぷり満たされたA Iが顔を描くとしたら？ 講演の後について、そ



顔学会ウラの力オ

～学会運営に携わる委員会のご紹介～

学会誌編集チーム

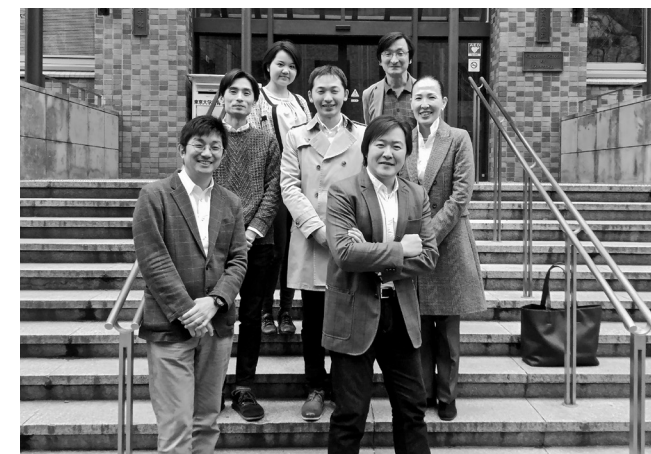
学会誌編集委員会では、文字通り学会誌の編集を行っています。数年前に論文誌と大会誌の分冊化が行われたのは、「大会の抄録が軽くなったな」という形で記憶に新しいのではないのでしょうか。仕事としては、特に、論文誌の方の企画や、投稿原稿の査読に関し、年に4回ほど編集委員会を開いて検討することがメインとなります。メンバーは、大学だけではなく企業の方もおり、また所属機関は全国に広がっておりますため、開催日時は土日が多いです。旅費を含め、全てボランティアということもあり、なかなか出てこれない方もいらっしゃると思いますので、メールで審議したり、最近ではテレビ会議に参加してもらったりもしています。

具体的な雰囲気としては、委員会ではありますが堅苦しい審議が行われるわけではなく、噂話をしながら友人とお茶をしている感じででしょうか。とても楽しいです。少なくとも私は。その中で、顔学会ならではの、多様な分野のメンバーが、それぞれのバックグラウンドから意見を交わすことで、気づかないうちに、ひょっとしたら何かしらメンバーの本務に役

んな質問が出るのも成程、と思われました。かつては縁談や記念の役割を果たしていた肖像画が写真に変わり、精緻な描写では飽き足らず、細胞やDNAのデータが「人間の顔」となり、うっとりするようなデータは視覚や心に訴えるようになるのでしょうか、そんなことまで考え至るご講演でした。

顔は安堵と不安を併せ持つからこそ人間はそれにすがり、それに惑わされ、それに求め、それに答えを得て来ました。出来る事ならそれはいつまでも、人間にとっての重要な役割を果たし続ける存在であって欲しいと願います。

(番匠谷 めぐみ)



に立っているのかもしれませんが。

以上を読むといい加減に見えるかもしれませんが、査読する側も評価される、ということは常に頭において、会員の方に意義のある学会誌としての編集を心がけています。きっと伝わっていると信じています。私が委員長になってから投稿数が減ったような気がしますが、多分、気のせいです。「論文・研究ノート」以外にも、「トピックス」、「作品コーナー」、「読者の声」などもありますので、是非ご検討を。これを読んだ皆様が応援してくれて、来年は投稿数が増えるはず。あ、でもそろそろ私、交代かも。

(日本顔学会誌編集委員長 渋井 進)